

肖柏・宗長伝の一資料

——浄照坊藏『古筆切集』の一連歌切について——

岩 下 紀 之

肖柏の年譜としては、綿拔豊昭氏^(注1)「牡丹花肖柏年譜稿」が基本的業績として必見のものであり、宗長の年譜は、今なお大嶋俊子氏^(注2)「宗長年譜」に替るものがない。後進のものとしては、銘々が前記二著に書き込みをしつつ使用している現状である。

さて、表題とした『古筆切集』は、和泉書院から出版されたもので、写真版と、簡明な解説が収められている。ここで論じようとするのは、その五七番、牡丹花と極められた連歌懐紙切である。牡丹花肖柏筆の書跡か否かは問うところではなく、本文について問題としてみたい。

解説者の解説をまず掲ておこう。

賦何人連歌

遠世もか、らは

風の葛葉かな 聴雪

露にこ、ろを

すますあざちふ 肖柏

身にしむや月に

色そふ空ならむ 宗長

や、ふけわたる

よひのいなつま 玄清

右の解説に少しも異議はないので、これに基づいて、いささか考証を加えてみたい。

まず、この連歌は、聴雪(三条西実隆)、肖柏、宗長、玄清と、時の最高実力者達であり、彼らが同座している連歌の興行日時、場所等を調査してみる。この部分は、発句から、第四句までの切であり、原文は、さらに右の部分が

あつたはずで、そこに興行日時が明記されていたはずであるが、その端作の部分が切断されているのである。ところが、偶然にもその部分を推定復元することが可能である。

【再昌草】 永正五年七月に、

卅日 玄清張行、宗祇追善連歌発句

とをき世もか、らは風の葛葉かな

と見えており、まさしく、この連歌懐紙切の発句と一致している。綿拔氏「年譜稿」に指摘の通り、同日は好運にも【実隆公記】も備わっており、同日条にこうある。

今日於玄清庵有宗祇追善連哥、予発句所望之間遣之、

仍一荷三種送之了

とをき世もか、らは風の葛葉かな

以上から見て、この連歌は永正五年七月三十日、連歌師玄清宅において、宗祇追善のため興行せられたものである。【実隆公記】 八月五日紙背には、七月卅日付の肖柏書状があり、

今日一座事依御発句一入皆々催感涙候、宗長殊言語道

断亡魂必可令納受之由申候、

また、

抑三種両樟被送下候、存存寄之条然而其興難申尽候、

焔牧、宗長同可然之様可申入之由候

と書いている。まことにその時の感興思い遣るべきである。

宗祇は門下の連歌師達から敬愛され、その実力は世を圧した大才であつた。宗長のさまざまな著作によれば、毎年の忌日には、どこに旅していようと必ず追悼の連歌を作っている。永正五年には、実隆の発句で、百韻を巻いていたが、この断片から冒頭四句が判明したことになる。

箱根湯本で宗祇が死去したのは、文龜二年のことであつた。永正五年はその七回忌にあたる。【再昌草】には、七月廿四日に、宗長勸進の品経和歌のことが見え、【実隆公記】には、それについての一連の記事がある。

廿三日

抑明日宗祇追善品経和歌披講事宗長張行、式百疋、素

麵一盆、食籠一、桃一器、茶等送進上之、仍明日経営

之儀、湯漬以下事招宗寿申付之、一夜馳走也

すなわち、前日から和歌披講のための準備が始まっている。

廿四日

未刻許各來臨、品経有披講事、

冷泉大納言説師、四辻新大納言彈琴、甘露寺黄門 飛鳥

井中納言冷大講之、中御門中納言 相公羽林 姉小路

三位 頭中将 藏人弁講師

肖柏 泰謙 道堅 宗長 玄清 統秋朝臣 政宣 孝

盛 兼久

講頌之間所々有付物、其後楽三、有興、湯漬、素麵等、

其他土器物、食籠、数巡盃酌、黄昏後各分散、及歌舞、
催懷旧之涙而已、今日儀尤有興

これは、公卿を始めとする盛大な行事で、宗祇、実隆、宗
長らの人望と実力を物語っている。

廿五日

早朝宗長送人、謝昨日之事

とあり、さらに翌廿六日

肖柏、玄清、宗長等来、謝一昨日事

とあるので、地下連歌師たちの主導のもとでこの法事が営
まれたことがわかる。特に経済の面では宗長が最も働いて
いることも、明らかであろう。この一連の行事の締めくく
りとして卅日の百韻連歌が興行されたのであり、こちらは
玄清宅で行なわれたのであった。

なお、永正二年に行なわれた宗祇年忌の百韻連歌は、太
田武夫氏の所蔵にかかる卷子本として伝来しており、これ
は原懐紙を卷子に綴じたものと思われる。ここに端作と脇
句までを引用しておこう。

「永正二年七月廿九日

宗祇年忌

賦山何連歌

天かける玉や

この比秋の風 肖柏

萩す、きさく

やとの夕暮 宗長

以下百韻が全く伝来している。これを根拠に、問題の連歌
切の端作部分は、次のように復元できることになろう。

「永正五年七月卅日

宗祇年忌

賦何人連歌

遠世もか、らは

風の葛葉かな 聴雪

以下となる。宗祇年忌とした個所は、あるいは、宗祇七回
忌等の文字になつていたかもしれない。

これで考証は一応尽きるのであるが、最後に気付いた関
連事項を記しておきたい。

肖柏、宗長らの七月卅日の動静がここで判明しており、
冒頭に示した二つの年譜に当日の記述をおきながら、
きる。宗長についていえば、この七回忌につき、かなりの
尽力をしているが、『実隆公記』七月の記事に、品経和歌、
この百韻とともに、『宗長百番連歌合』の記述があらわれる。

宗長にとって、この自連歌合はかなり重要な作品であるが、宗祇七回忌がある意味では目標となっていたのかもしれない。

またこの当時の連歌師たちの序列も、それとなく伝わって来よう。玄清宅での興行にもかかわらず、聴雪、肖柏、宗長、玄清の順序になっている。

室町後期になると、連歌はあらかじめ一順程度を持ちまわって、前もって作っておくようになっていく例が知られる。しかし、この場合は、忌日当日に実隆が発句を作っているのであって、まだ連歌の当座性は健在なのであった。

注

注1 連歌俳諧研究六六号

注2 女子大国文二四号

注3 『中世歌壇史の研究 室町後期』一三九、一四〇、七三九ページ